

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32652

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25870547

研究課題名(和文) 古典教育におけるドラマ教育の可能性についての研究

研究課題名(英文) A study of the possibility of drama education in classical education

研究代表者

中野 貴文 (NAKANO, Takafumi)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：70582972

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：古典教育の新たな可能性を模索し、その成果を2回学会に発表し、2本の論文にして公表した。さらに、5つの大学から学生を集めて、古典文学を題材としたワークショップを開催した。具体的には、古典文学(中でも、和歌)を用いたドラマを作成し、即興で演じる活動である。これは、従来の古典教育を劇的に変換させるものである。古典文学を媒介として、学生の想像力を刺激することが、新しい古典教育の方向性であると提言した。

研究成果の概要(英文)：In order to explore new possibilities of classical education, I announced the results in two societies. I published the results by writing two papers. In addition, attracting students from five universities, we held a workshop that was the theme of classical literature. Specifically, it is activity to create a drama based on classical literature (especially Japanese poetry Waka), play in an improvisational way. This is the drastic conversion of a conventional education of classical literature. I proposed that directionality of new classical education, or the power of imagination of the student is stimulated by classical literature.

研究分野：教科教育

キーワード：古典文学 ドラマ教育 古典教育

1. 研究開始当初の背景

従来の古典教育は、単語・文法といった古典読解技術の習得にこだわるあまり、古典文学それ自体の面白さを教授することができず、その結果、中高生の古典離れを助長し続けてきた。かかる現状を鑑み、原文至上主義に代わる全く新しい古典教育の方法を提示することが急務であった、以上が本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、生徒が主体的に学ぶ参加獲得型の授業スタイル、とりわけドラマ教育の手法を古典の授業に導入することで、古典の魅力を引き出し、生徒が主体的・身体的に古典に接し、その素晴らしさを自らのものとするよう促す授業プログラム作りを目指すものである。

より具体的には、(1) 古典文学の魅力を理解してもらうこと、(2) 古典に対して、主体的・能動的に接すること、以上の2点のアポリアを明確に対応することが求められた。

3. 研究の方法

主に大学生を対象に、ドラマ教育的な手法の有効性について検証した。まず古典文学の研究者である申請者自身が、学生たちに古典の面白さや本質を伝えることを何度も繰り返して、対象となる古典テキストを賞玩してもらう。その後、古典文学を素材としたドラマ脚本化とその(即興的)演劇化を行う。その過程で、様々なアプローチから古典に接した学生たちに複数回インタビューを取り、それを分析・検証することによって、古典を対象としたドラマ教育の可能性について提言をまとめた。以下、研究の目的の項で示した2点について、それぞれ研究の方法を説明する。

(1) 現状、古典文学と生徒・学生とを遠ざけている大きな原因が、受験古典を主因とする古典原文(読解)至上主義の存在であることは、各種調査の結果明らかである。生徒・学生は、古典に対し自らに関わる何かであると認識することを許されず、受験勉強という一点(それは、重要な一点であるとはいえ)にのみ、古典学習の意義が存在するという現状は、学習者のモチベーションを大いに低下させていよう。如上の問題を解消すべく、まずは古典文学の魅力を十二分に伝えることから始めなければならない。

加えて、原文至上主義の重要な問題点に、学習者の自由が許されない(逆説的にいえば、だからこそ受験として成立する、ということになるのだが)という点が挙げられよう。ある問いに対し、正答が明確に定められており、かつその正答を持っているのが常に教員の側であるということ、これも大いに学習者のモチベーションを低下させていると考えら

れよう。

したがって、学習者の古典教育へのモチベーションを高めるためには、対象となる古典文学作品に対する、個々の学習者の主観的解釈(無論、それは語釈の自由を意味するものではない。学習者それぞれの感想の自由、の謂である)の披瀝を認め、それを初発段階の授業の中心に据えることが不可欠である。さらには、従来教員の解釈を生徒・学生に伝達する場であった授業を、個々の生徒・学生同士の意見の共有の場へと転換させることも必須であろう。以上の点に留意しながら、授業プログラムを開発し、その成果をアンケートの結果等から分析し、さらなる改良・開発に努めた。

(2) 学習者の反響で特に目を惹いたのが、哲学的事象への関心の高さである。具体的には生と死、欲望、ジェンダーなど、自らの人生と深く関わるテーマに対しては、その問題を自らのものと捉え、熱心に授業に取り組む姿勢がうかがわれた。ここでも重要なのは、それらの問いに対し、教員の一方的な知見の伝達ではなく、あくまで自身の生に置き換えてどう考えるのか、回答の固有性がモチベーションを支えているという点であった。これは贅言するまでもなく、上記(1)と密接につながる問題に他ならない。

以上をふまえ、さらに主体的・能動的に古典学習に臨んでもらうべく、古典文学を現代風にアレンジして、ドラマで演じてもらう、あるいはそれまでに得た古典の知識を反映させて、新たな表象を生み出すなどといった表現活動を学習のゴールとして設定し、そのプログラム開発を行った。なおこれらの学習プログラムには、即興ドラマを演じることで、身体的に古典文学に接するという副次的な効果も考慮した。

4. 研究成果

様々な授業実践の結果、古典文学をただ読むだけではなく、それを創造的作品作りの契機とすることの重要性が明らかになった。それは、先行研究の蓄積への深い理解と、享受者の創造的個性とを両立させる教育方法である。その具体的成果は、以下に記した雑誌論文・学会発表で公表したことに加え、自らが中心となって企画した「わくわく文学ワークショップ」と題する、他大学の学生・教員をも交えたワークショップ実践においても、十二分に示された。以下、それぞれの成果を具体的に説明する。

まず初年度においては、前述の授業プログラム開発の始発として、高校古典教科書の定番教材の一つである『伊勢物語』『芥川』を俎上に載せた。熊本大学教育学部の学生たちを対象に、古典文学演習の授業コマを用い、3か月12時間近くに及ぶ授業計画を組み立てた。最初の数時間では、徹底した対話型授業を通じて、「芥川」の魅力や問題点を共有す

ることを目指した。その上で、続く数時間で該当話の現代劇化を試み、班ごとに脚本化にとりかかってもらった。最後1コマ前の授業で発表し、最後の授業回で振り返りを行った。詳細は「古典教育におけるドラマ実践 『伊勢物語』『芥川』より」にまとめて公表した。

学生たちが、古典に関心を持ち、主体的に取り組めるようになったことや、脚本を作成したり配役を決めたりといったグループワークを通じて、アクティブ・ラーニングの実践にもつながったことなどが成果として挙げられる一方で、作品創りにあまりに時間がかかったこと、従来の授業方法よりも専門性が減少しているのではないかという懸念があること、少人数のゼミだから可能であった側面も指摘されたことなどといった課題も浮上した。

二年目は、研究代表者の所属が教育学部から文学部（正確には現代教養学部日本文学専攻）に移ったことを契機に、如上の問題も解決すべく、授業内容・方法のさらなる精練に取り組んだ。

具体的には、前述の『伊勢物語』のドラマ化では、舞台を現代に置き換えて脚本化する学生グループばかりで、学習者の古典への親近感を増加させる効果は認められたものの、古典世界への深い理解を促す効果については、必ずしも満足の行く結果とはいえなかった。古典文学の専門家が、古典教育の実践を行う意義に照らし合わせて考えても、ドラマ教育の効果を保ちながら古典文学の深い専門性をどう学習者に伝えるかが、次なる課題として浮上した。

そこで、古典の専門性を確保したドラマ教育の授業プログラムを開発すべく様々な検討を重ねた結果、和歌をもととした歌物語の作成というワークに行き当たった。これは、一首の和歌が詠まれた背景を各自（続いて各グループ）で想像し、それを物語にして即興で演じてもらうというものである。このドラマワークの効果を検証し、さらに古典文学が、今後益々その重要性が増すとされる、大学におけるアクティブラーニングに対応できることを証明するため、他大学の教員・学生をも動員して、ワークショップを開催した。

「わくわく 文学ワークショップ」と題したその取り組みは、研究代表者に加えて、駒澤大学教授中嶋真也氏、成蹊大学准教授平野多恵氏、日本大学教授佐藤至子氏、法政大学教授小林ふみ子氏（いずれも専門は古典文学研究）諸氏らと共同で企画したものである。それぞれの大学から学生を集い、前述のドラマ実践をメインとしながら、初対面の人とのグループワークを通じて文学をアクティブに学ぶ体験を積んでもらうことを企図したものである。参加者は5大学から、合計30人に及んだ。

当日、とりわけ留意したことは、ほとんどが初対面の参加者同士が、また同時にほとん

どがドラマワークを体験したことのない学習者が、スムーズにグループワークに移れるよう、アイスブレイキングに十分な時間を割いたことである。特に自己紹介を兼ねた仲間さがし系のワークは好評で、参加者同士が最低限の他者情報を共有することによって、学生をスムーズに後半のワークに誘導することができた。なおこのような導入部分の工夫の重要性は、通常授業の中においてもしばしば散見したことである。専門性を高めた授業プログラムを行うときこそ、学習者の心理的ハードルを予め下げておくことが肝要である。

その後は昼食をはさんで、いよいよメインのドラマワークを展開した。このワークのポイントは、指定された一首「起きもせず寝もせず夜を明かしては春のものとしてながめくらしつ」が詠まれた背景を想像し、この歌を必ず取り入れて脚本を考えることが求められるため、自然、古典の表現世界に深く入り込むことが期待される点である。

研究代表者自身がファシリテーターとなり、古典和歌を素材とした歌物語創りを行うというワークは、学生たちの想像力・創造力を大いに刺激し、研究代表者の提言するドラマを用いた古典教育が、学生たちの深い学びは言うに及ばず、文学に関わること自体への誇りすら導き出すことが、アンケート等の結果から明らかになった。

先ほど学習者に深い専門性を期待したことは述べたが、一方で彼ら彼女らが創造性を自由に発揮できる授業準備にも、十分意を用いた。当該歌が『伊勢物語』第二段所収であることは伏せ、研究代表者が最低限の語釈を示した以外は、各自が歌の言葉から想像を広げ、歌の生まれた世界観や背景をイメージするよう促した。ドラマ作りに苦労しているグループには、ファシリテーターである研究代表者を中心に教員が周回してフォローした。

披露された劇は千年の時を超える和歌の普遍性を謳うものから、父と娘の絆を主題とした現代劇まで多岐に亘った。ファシリテーターはその後『伊勢物語』本文を示し、自分たちの脚本と比較させながら読みを深め、それらに対する学生たちの意見を積極的に聞き出しながら、「和歌」や「物語」に対する考察を深めていった。

最後に、このワークショップの感想をアンケートにとり、回収し分析した。また研究代表者の所属する東京女子大学から参加した学生には個別に聞き取りを行い、ワークを経験したことでも得られたこと等を振り返ってもらった。それらから得られた知見でとりわけ重要だと思われたことが、学生たちの多くが、このワークを経験したことで（古典）文学を学ぶことに意義、さらには誇りを感じることができたと述べた点である。

ここには、中高生がそうであるように、大学生もまた古典文学を学ぶことに、意味を見出し得なくなっている現状が現れている。

本研究開始当初の背景の項で述べたように、現状の古典教育は語釈等に拘泥するあまり、学習者の生活感覚と大きく乖離してしまい、その結果何のために学習しているのか、その目的を伝えきれなくなっているのだ。

本研究は、現状の古典教育の方法的変革を具体的に提起するものであると同時に、昨今の実学重視の傾向の中で、改めて文学研究の存在意義そのものを問い直した試みなのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

中野貴文「古典教育におけるドラマ実践『伊勢物語』『芥川』より」、『国語国文学研究と教育』、熊本大学教育学部国語科発刊、査読無、第52巻、2014、pp.101-117

小林ふみ子・中嶋真也・中野貴文・平野多恵「古典文学をアクティブ・ラーニングでまなぶ 和歌を演じるワークショップ」、『リポート笠間』、笠間書院、査読無、第58号、2015、pp.5-8

中野貴文「研究と教育の架橋 専門性の行方」、『国語と国文学』、東京大学国語国文学会発刊、査読無、十一月号掲載決定、第92巻、2015

[学会発表](計 2件)

中野貴文「演劇的知の教育方法的検討(2) ドラマ的な手法を用いた古典文学」、2013年10月11日~12日、広島大学(広島市鏡山)、第50回日本教育方法学会

中野貴文「古典研究と教育の架橋~源氏・平家・徒然草~」、2014年11月7日、東京大学(東京都文京区本郷)、第329回東京大学中世文学研究会

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

アクティブラーニング研究会「わくわく 文学ワークショップ」(於法政大学、2015.3.27) 計画兼ファシリテーター

6. 研究組織

(1)研究代表者

中野 貴文 (NAKANO, Takafumi)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号: 70582972

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: